

ア シ エ ン バ ・ レ コ レ ク シ ヨ ン

少女の追憶

REFLEX (著) 沢北和彦

Scene I 青の再来

宇宙世紀0088年、日時不詳――。

グリプス戦役の戦禍が続くなか、とあるデブリを疾駆する青い機影があった。

操者はまだ年端も行かない少女、アシェンバ・ラル。

かつてジオンの青い巨星と呼ばれた男を父に持つ少女。

一年戦争終結後にアクシズに身を投じた彼女は、パイロット候補生として数多くのMSを乗りこなしてきた。

歴戦の勇士が集うアクシズにおいても、多くのパイロットが、彼女の腕に舌を巻く。

だが、コックピットを降りる彼女を見たとき、誰もが驚き、戦慄する。

アシェンバ・ラルは、まだ一〇歳になったばかりの、小さな少女だった。

「どうだった？」

アクシズへ帰還し、フライルーのコックピットから降りてきた少女に、マーカスが声をかけた。

中肉中背の青年で、アクシズの整備部門ではまだまだ新米だが、周囲に言わせれば「筋は良い」らしい。

「テイターンズの実験部隊で使われていた機体らしいよ。複雑な変形機構が入ってるけど、



このサイズであれだけ動けるなんて、スゴ
いと思わない？」

「こやかに言うマークスに、
「だからなに？」

アシエンバは素っ気ない。が、当のマー
カスは気にした様子もなかった。

「テイターンズ機の評価テストを任された
って聞いたよ。ハマーンさま直々だって？
期待されてるんだね」

この屈託のない笑みは、どういう感情か
らなのだろうーマークスを見るたび、ア
シエンバは思う。

数日前、摂政ハマーン・カイン直々の命
を受け、テイターンズで運用されてきたM
Sの評価テストを任された。

新型MS開発に向けて、技術のフィード
バックが狙いだ。

それに合わせて、マークスが専任整備士
の一人に選ばれた。

奇縁だろうか。それとも、必然だろうか。

ふと考え込んでいたアシエンバがハッと我に返ると、自分の顔を覗き込むマークスに気づいた。

「どうしたの？」

「近い」

手で青年の顔を押し退けて、アシエンバは歩き出したが、すぐに振り返って、

「整備、任せたから」

無愛想に言ったのだが、マークスは満面の笑みを浮かべてうなずいてみせた。

「任せて。きっちりデータ取れるようにしないと、コイツも可哀相だ」

ファイルを見上げる青年の横顔を一瞥して、アシエンバは背を向けた。

これは、決して表舞台に立つことのない、ある少女の物語である――。

※この続きは製品版でお願いいたします。

※この物語はフィクションです。実際の個人・団体・事件等とは一切関係ありません。登場する人物、名称はすべて架空のものです。また、機動戦士ガンダムにおける公式設定ではありません。

※加筆、修正、無断転載等のご遠慮くださいますよう、お願い申し上げます。